

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと靜にて、
熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集
ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人
のみなれば。五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官
命を蒙り、このセイゴンの港まで來し頃は、目に見るもの、耳
に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記し
つる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新報に載せら
れて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、
穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植物金石、さ
ては風俗などをさへ珍しげにしるしを、心ある人はいかにか
見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものをせむとて買ひし冊
子もまが白紙のまゝなるは、獨逸にて物學びせし間に、一種の
「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、
これには別に故あり。げに東に還る今の我は、西に航せし昔の
我ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世の
うきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、
われとわが心土へ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふ
の非なるわが瞬間の感觸を、筆に寫して誰にか見せむ。これや
日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。嗚呼、
フリンヂアイシの港を出でより、はや二十日あまりを経ぬ。
世の常ならば生面の客に土へ交を結びて、旅の憂土を慰めあふ
が航海の習なるに、微恙にことよせて席の裡にのみ籠りて、同
行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩まし